Eureka Ⅷ

六年制通信　№12　令和２年７月31日（金）号

継続と才能

吉田松陰の松下村塾を訪れたのはもう20年以上も前ですが、きれいに保存されているものの、だからこそ余計にというべきか、その狭さに驚いたものでした。あの狭い小屋から明治維新の原動力となる若者たちが多く輩出されたことをどう考えればよいのか。吉田松陰のことは、高杉晋作と合わせて、司馬遼太郎の『世に棲む日日』を読めばわかるとしたものですが、それでもなお、あの小さな私塾からどうしてと思わざるを得ません。あの時代の持ちえた一つの奇跡でしょうね。

松陰は政治家ではなく思想家であり教育者であった、ということになっています。しかし30歳の若さで処刑されていますから、もっと長生きしていたらどうなっていたか、本当のところはわからないと言っていいと思います。ただ、非常な学問好きであったことと未知なるものに対する好奇心が人並外れていたことは間違いないと思います。獄中にあって、他の囚人に『論語』や『孟子』を講義したことは有名だし、その時の記録は『講孟余話』として残っており、君たちも岩波文庫で読めます。何度か集会で話した「[注]学問の大禁忌は作輟なり」はこの本の中にあります。

また、私の好きなエピソードにこんな話があります。獄中から本を求める松陰に、牢番は何も牢屋の中で勉強しなくてもいいではないかと言うのですね。すると松陰はこう答えます。これが吉田松陰の本質のように私には思えます。彼は「およそ人一日この世にあれば、一日の食を喰らい、一日の衣を着、一日の家に居る。なんぞ一日の学問、一日の事業に励まざらんや」と答えたのです。人が一日生きるということは一日分のご飯を食べ、その日一日服を着て、その日一日の家に住む、つまり一日分の衣食住を享受するのだから、どうして一日分の勉強や仕事をしないでいられますか、して当然でしょうと言うのです。これが松陰の確固たる信念だと私には思えます。これはつまり怠ることなく毎日勉強しなさい、仕事しなさいということです。松陰はこのことを至極当然と考え微塵も疑っていないようです。恐らく、自分は努力をしているという意識すらなかったことでしょう。息をするように勉強したのですから。努力をしていると自分で意識しているようではいけないと、これは幸田露伴も言っていますが、勉強に限らず何事においても継続するのは努力を要します。私たち凡人にはね。しかし継続しているうちに、それが当たり前になる瞬間があると言われています。その瞬間までの努力ができない人が多いと言うだけです。

さて、松陰のような人を師に持った弟子たちは勉強せざるを得ないでしょうから、大いに学問が進んだことは容易に想像できますね。松陰は、どんな人間にも一つや二

つは能力があるから、それを見つけて大切に育てなければいけない。人を大切にするということはそういうことだとも言っています。彼の弟子たちのその後を見れば、それぞれの才能を開花させていることがよくわかります。あるドラマの主人公が、能力を持った人間にはそれを正しく行使する責務があると言いましたが、そもそもその能力を見つけ育むためにも勉強をやめてはいけないのですね。当たり前のように継続すること、それを苦にしないで続けること、そんな領域に達したいものです。継続こそが才能だと、これは確かイチロー選手の言葉でしたか。そういえば、昔高名な落語家が、自分たちは高座が 20 分から 30 分の時が多いから一日にそれだけしか働いていないように見えるけど、実は皆さんが働いている 8 時間から 9 時間は毎日のお稽古に当てているのです、むしろ私たちには日曜日もありません。休んではいけないのです。毎日のお稽古でしか芸は培われません、そう言っていました。その落語家もお稽古を嫌々やっているわけではないでしょう。ごく当たり前のように毎日、飽きることなく稽古したのだと思います。

私たちは、特に若い君たちには自分にどんな才能があるのか、なかなかわからないものです。でも、勉強を継続することによって、自分には継続する才能があるということを知ることができます。そして、その才能を大切に育てたいですね。

注一年生の諸君は知らなかったですね。大禁忌（だいきんき）とは絶対にやってはいけないこと。作輟（さくてつ）とはやったりやらなかったりすること。つまり勉強するときは毎日継続することが最も大切だという教え。これと同じ趣旨のことは本居宣長も言っています。真理と考えていいでしょう。

今週のおすすめ

・天野貴元　『オール・イン』　（宝島社）

サブタイトルは「実録・奨励会三段リーグ」。将棋のプロ棋士には四段に昇段しないとなれません。三段リーグの上位 2 名だけがその権利を得ます。しかも 26 歳を超えて三段リーグに在籍することはできません。プロ棋士になるのに年齢制限があるのですね。天野さんは 16 歳で三段リーグに入った天才。それから 10 年。リーグは一期半年ですから 20 期の在籍。つまりプロになるチャンスが 20 回あったということですが、そのすべてを逃し奨励会を退会します。高校にもいかず将棋に打ち込んだ人生が終わりました。さらに追い打ちをかけるように、舌ガンを宣告され手術をします。この本はそのころに書かれたものです。この中で天野さんは「人が、その手に己の運命を握ることができたなら、どんなに楽だろうと思う。しかし、実際にはどんな大金を積んだとしても、それはかなわない。だからこそ、人生は面白いのだ」と語っています。私は羽生永世七冠をはじめ棋士の皆さんの立ち居振る舞いを敬意をもって見ているのですが、きっと彼らは、人生をかけてなおプロになれなかった多くの「天才」たちの分まで真摯に将棋に向き合っているのですね。そのことがよくわかった気がしました。天野さんは 30 歳でこの世を去っています。

BGM は *ウォーカー・ブラザーズ の ダンス天国* でした…。